

2012年の「信仰年」について

2011年12月3日
京都司教 +パウロ大塚喜直

1. 「信仰年」開催の発表

ベネディクト16世教皇は、2011年10月17日（月）に、自発教令『ポルタ・フィデイ——「信仰年」開催の告示（2011年10月11日付）』を發布しました。これは、10月16日（日）午前、サンピエトロ大聖堂で司式した教皇庁「新福音化推進評議会」主催の第1回国際会議の閉会ミサの説教の中で、特別年の「信仰年」の開催を発表しました。

2. 「信仰年」開催期間と2つの記念

「信仰年」は、『第二バチカン公会議』開幕50周年の2012年10月11日に始まり、2013年11月24日の王であるキリストの祭日に終わります。

（第二バチカン公会議は、1962年から1965年まで、4年にわたって行われました）

2012年10月11日という「信仰年」開始日は、『カトリック教会のカテキズム』発布20周年を記念する日でもあります。『カトリック教会のカテキズム』は、信仰の力とすばらしさをすべての信者に示すために、福者ヨハネ・パウロ二世が發布しました。

3. シノドス（世界代表司教会議）開催

2012年10月には、シノドスが開催され、テーマは「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」です。このシノドスも、信仰について特別に考察し、再発見するための時へと全教会を促すよい機会となります。

4. 「信仰年」の前例

教会が「信仰年」を開催するよう招かれるのは、これが初めてではなく、教皇パウロ六世は、聖ペトロとパウロの最高のあかし（殉教）の1900周年を記念するために、1967年に「信仰年」を開催しました。（当時、教会は公会議の直後で、大きな混乱があった）

パウロ六世は「信仰年」が全教会にとって「誠実かつ荘厳に同じ信仰告白を行う」ための正式な機会となると考え、さらに教皇は、この信仰告白が「個人また共同で、自由に自覚をもって、内的にも外的にも、謙遜かつ率直に」行われることを望みました。教皇はこうして全教会が「信仰の正確な知識を自分のものとし、そこから信仰を生かし、清め、強め、告白することができるようになる」と考えたのです。

「信仰年」は『神の民のクレド』をもって締めくくられました。『神の民のクレド』の目的は、幾世紀にもわたりすべての信者の遺産を形づくってきた根本的な内容を確認し、理解し、さらに探究することの必要性を示すことでした。それは、過去とはまったく異なる歴史状況の中で一貫したあかしを行うためでした。

5. ベネディクト16世教皇の「信仰年」

発布の文書は、「ポルタ・フィデイ」「信仰の門」（使徒言行録14・27）という言葉で始まります。「常にわたしたちに開かれています。それはわたしたちを神との交わりの生活へと促し、神の教会へと導き入れてくれます。神のことばがのべ伝えられ、わたしたちを造り変える恵みによって心が形づくられるとき、わたしたちはこの門を通ることができます。」

ベネディクト16世教皇は、信仰年をただ記念の意味ではなく、「諸国民への」宣教と新しい福音宣教という観点から、宣教的な意味で行うといわれます。

信仰年については、教皇庁からさらなる詳細な文書が発表される予定です。どのように私たちがこの度の「信仰年」を受けとめ、準備し、また有意義に過ごすことができるか、お知らせします。どうぞ、実りある信仰年となるようにお祈りください。

以上。